【 図画工作科 】教科提案

『 “感じる” ⇔ “表す” 学びの連鎖 』～ 感性を働かせて対象と向き合う ～

1．研究テーマの設定

（1）学校提案とかかわって

子どもたちは想像力を働かせ，美しい形や色の感じ，その組み合わせに気付き，思いに合った表し方を見つけながら造形活動に取り組んでいる。図画工作科の学習はつくりだすことそのものが目的であり，作品はその結果として表れるものといえる。造形活動において出来上がったもの（作品）より，そこに至るまでの「こと（過程）」が一層重要なのである。

子どもの造形活動は連続した一連の行為であるといえる。子どもは感性を働かせて対象と向き合って“感じ”，その“感じた”ものを“表そう”とし，また，“表した”ものから“感じ”，そこから思いうかんだものをつけたしたりつくりかえたりしてまた“表し”…というように学びを連鎖させながら，つくり出す喜びを味わう。それは自分の力で学び取った喜びである。

子どもの表現は，イメージを探ることそのものであったり，行為によってイメージをかたちづくっていくものであったり，確かなイメージによって行為として表されているものであったりする。そして，考えて表現したことや，偶然のようにここで思いついてやったこと，また，ああでもないこうでもないと試行錯誤の上に選んで行ったことすべてが折り重なり，目に見える色やかたちをつくりだす。そして，つくっているうちに新しいイメージが生まれ，次の行為につながっていく。これらは「つくる」という言葉から連想するような一方通行の働きではなく，かたちづくりながらコミュニケーションをしているような，絶え間なく対話をしつづけている活動である。子どもの表現方法は，イメージをもとにつくるというより，今ここで思いつき，表しながら感じ，また考え，新しい思いつきによって次々とつくりかえていくものである。よって，感じることと表すことには行きつ戻りつの関係（⇔）がある。子どもたちはその活動のなかで色や形，バランスを直感的に構成していきながら，自分らしい表現をつくり出していくのである。

（2）図画工作科でめざす子ども像

造形的表現やまわりの人に関心を持ち，自分なりに感じとる力や自分らしい造形的表現力をもっている子

子どもたちは新しいものへ向かっていく逞しいエネルギーをもっている。造形活動に取り組む子どもは手や心，体全体を働かせ，思いを膨らませながら夢中になって活動している。それは「もっと自分らしく表現したい」という願いの表れでもある。そんな自分の歩みを振り返りながら，より一層自分らしい表し方を探り，自分の表し方に自信をもって積極的に表現する子どもを育てたい。あわせて，図画工作科で育みたい力を上記に挙げる。

≪図画工作科で育みたい力≫

- 「感じる力」　表し方のよさに気づいたり，思いついたりする
- 「考える力」　選んだり試したり，表現方法を見つけたりする
- 「みる・かく・つくる力」　形や色を基に感覚や気持ちを活かして表す

2．図画工作科における「学びの質の高まり」

図画工作科において，感性を働かせて対象と向き合うこと，自己と対話することは欠かせない要素である。それらは自分の表現，造形活動の軸になる。そこに，友達との対話が絡み合うことは，自分らしい表現をつくるために大きな作用をする。「共に学ぶ」学習は，子どもの資質や能力が働き，伸びる機会のひとつであるといえる。友達の活動する様子を共感的に受け止めたり，そこから新しいアイデアを思いついたりしながら，自分の力を伸ばし高めていく。図画工作科における「学びの質の高まり」とは，材料や場所，活動を共有しながら，互いのよさを認め合う自然な交流を通して，自分らしい造形的表現を確かなものにしていくことであるとらえている。

このような点から，図画工作科における「学びの質の高まり」を支えるものとして，子ども一人一人が自分らしい表現をのびのびと求めていける環境はもちろん，子どもたち同士がかかわり合いやすい雰囲気づくりや互いの表現や活動の積極的な交流，互いのよさを認め合い，よりよいものを目指す姿勢を大切にしたい。そのような「学びの質の高まり」が感じられる場面では，教科の枠をこえ他教科や他の領域にも及んで子どもたちの学習がひろがることもある。子どもの豊かな育ちを目指し，他教科，他領域と同様に，図画工作科から発信する子どもの育ちを立体的にとらえていきたい。

３．研究の展望

（１）学習展開と場の設定

図画工作科における学習は，造形感覚を十分働かせることができる授業展開や場の設定が必要とされる。一人一人の表現過程を考慮し，試行錯誤を繰り返す時間や場を十分保障することによって，造形活動における成就感や満足感を味わい，次の活動に対する見通しや意欲をもつことができると考えるからである。そのためには，子どもに育みたい力を明確にすることが重要となる。すべての学習を通して図画工作科で育みたい力を育てることを軸とし，一つ一つの題材の中で何をどのように学ばせたいのかを焦点化し，学習をデザインしなければならない。子どもの意識の流れを大切にした学習展開，自分の表現や活動に対する振り返りの場や時間の位置付け，互いの思いや願い，工夫や表現を伝え合う交流の場の設定なども重要となる。

（２）題材設定と題材配列

子どもが出会う一つ一つの題材は，学習をつくっていくもととなるものであり，題材によって子どもの表現意欲が喚起されることも確かである。したがって，子どもの思いや願いが膨らむような魅力的な（色や形，材料や場所を扱った）題材や表現活動をひろげていく可能性をもつ題材，一人一人が自由に試行錯誤でき，自分らしい表し方で追究することができる題材を設定したい。しかし一つ一つの題材で力が育つことを主張するのは難しい。そこで，子どもたちの一人一人の継続的な育ちをめざすために，これらの題材間のつながりを意識し，すべての題材において連続的に力を育てていくという見通しを持ち，そのためにはどのような題材がよいのか，どのような題材配列がよいのかを考えていく。

（３）みとりと支援

子ども一人一人の見方や感じ方，表現方法，そしてその学習過程を大切にする図画工作科の学習では，一人一人の思いや活動の様々な場面をとらえた教師のみとりと支援が，学習のひろがりや深まりを左右したり，子どもの意欲の高まりに影響したりする。一人一人がもっている思いや願い，表現のすべてをその子のよさとして認めることによって，子どもはのびのびと思う存分造形活動を楽しむことができるだろう。子どもの歩みを多面的，継続的に見ていく眼や姿勢が非常に重要となる。そこで，心の動き，その子の見方や感じ方の表れを子ども自身が気づける，またはみんなの気づきに変える工夫（※１），子ども自身が活動の過程で自分の表現を確かめることができたり，後で活動や表現を振り返ることができたりする手立て（※２），子ども自身の学びが足跡となって残り，蓄積していくもの（※３）を大切にする。それらは子ども自身が次の課題や活動や表現を進めていくのにも有効であると同時に，教師が子どもの見方や感じ方，表現や活動をみとり，適切な支援や指導を考えるのに活かすことができるのである。

※１子どもの反応や表情，つぶやきを板書したり，全体の場に取り上げたりする
※２子どもの表現や活動から生み出されるものや出来上がったもの，作品等を記録する
※３図工カードを効果的に活用する
…自分の表し方やこれまでの歩みを見直す場と時間

みとりも支援も「子どものよさを育んでいくもの」であるという考え方が基本であり，個のよさを活かし，子どもの活動に寄り添ったものでなければならない。そこには学習場面での間接的，直接的な教師の働きかけ，個や状況に合わせた材料や用具の吟味，活動場所や時間の保障なども含まれる。また，支援は学習全体をおおうものだけでなく，段階にあわせて（学習の展開における様々な場面で）行うものもある。

４．研究の評価

学習の中で身についた力は，子どもが歩み出す動き（体はもちろん心の動きも含める）や，一人一人の造形活動に表れるだろう。おそらく自分の成長は子ども自身が確かに感じるものであるはずである。そうして身についた力，一人一人のよさや可能性は，その子の新たな力となり，次への原動力となる。

一つ一つの題材の中で，子どもの学びの姿を通してそれぞれの育ちをみとるとともに，そこから題材の適切さ，題材に内包する価値などといった題材自身の評価も行うことができる。そうして，子どもも教師も同時に，次の課題が明らかにできる。教師は柔軟に子どもたちから生まれてきた課題に対応しながら次の学習をデザインし，子どもたちは自らの課題をもちながら次の学習に向き合う。

一人一人の歩みを大切にすること，それは図画工作科で一番大切にしたいことである。一人一人の学びの道筋をたどっていくことで，その子らしさが見えてくる。長い目で見てこそ，見えてくるものを大切にして評価する。前の題材では見つけにくかった学びを次の題材で見つけることもある。長期的な見方でのみとりや支援，評価を大切に進めていきたい。